

世界の著名な特許にみる ————— 第25回

世紀の発明事業列伝

〈その思いつきが、時代を動かす〉

ギエモンこと田中久重「東京銀座編」

銀座の歴史 江戸時代・明治時代

我が国最初の本格的な電信機工場「田中工場」・東芝発祥の日
技術コンサルタントとして「万般の機械考案の依頼に応ず」発明品
リスト

国産電話機 田中精助 若林銀次郎

電信の父「寺島宗則」の外交手腕

田中久重の流れ（田中工場・製機所）を汲む電気産業の起業家たち（沖
電気など）

田中久重 初代・二代の墓所 青山霊園

田中久重の珠玉の言葉・人生訓



芸術・科学・知財クリエイター・弁理士（雅号）

大樹 七海

はじめに

幕末から常に最先端の科学技術を追い求めてきたギエモンですが、仲間の手によって、日本に灯台や電信が敷設され、蒸気船が行き交い、陸上には蒸気機関車（陸蒸気：おかじょうき、と呼ばれた）が走るという、科学技術の成果が次々と社会に実装されていく、明治維新後の東京を無事に見届けることができました。

そうして、齢75を超えても発明意欲の衰えないギエモンは、文明開化の象徴ともいえる銀座に、東芝の発祥の地となる、通称田中工場を創業し、83歳にて人生の終焉を迎えます。アメリカで、エジソンが白熱電灯を発明して2年後の明治14年（1881年）でした。

日本の科学技術の近代化への歩みを、一人の人間が、その好奇心とひたむきな情熱とによって、体現していった、壮大な夢を駆け抜けた人生でした。

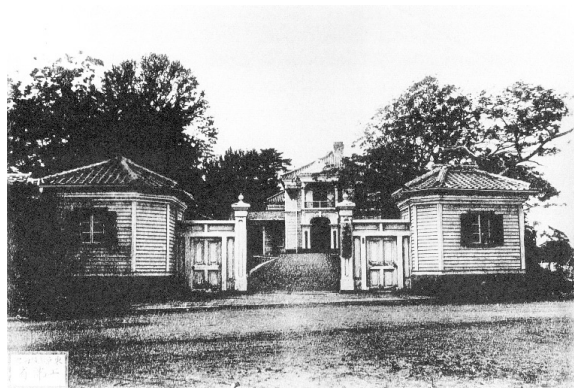
ギエモンは、世界が発明により変革していく様を追いつけ、そうしてこの黎明期に、次に続くエンジニアや発明事業家の多くを育てており、ギエモンの薫陶を受けた弟子や仲間たち、そしてギエモンこと田中久重の二代目を継いだ息子（養子）の田中大吉は、さらに洗練された形で、日本の近代化を進めていくことになります。

本号ではギエモンの終焉と、ギエモンの流れを継いでいくひとびとについて、お伝えします。

前号からのふりかえり

故郷の久留米にいたギエモンですが、明治維新後、旧佐賀藩時代に苦楽を共にした仲間たちは上京し、その産業科学技術の発展をさらに加速させるべく、新政府に出仕していました。

佐野常民は、日本初の万博を取り纏め、佐野常民やギエモンの養子・高弟の田中精助（田中精助のコラム参照）らは欧米へ研修に行き、殖産興業のために設置された新政府の工部省にて、石丸安世、石黒寛二らが精力的に活動していました。



出典：工部省庁舎、明治大正昭和建築写真聚覧

そうして一足先に工部省で奮闘している彼らから誘いを受けたギエモンは、明治6年、20代の弟子の田中大吉（二代目田中久重、次号以降特集）と川口市太郎を伴って上京し、一家一門、人生終焉の地となる東京への移住

を決め、創業します。

新たに事業の柱としたのは電信事業で、ギエモンらの工場は、苦心を重ねながら工部省の指定工場となります。

今号は、ようやく事業が軌道に乗り、ギエモンが技術コンサルタントの看板も掲げた、文明開化の象徴である銀座からスタートしたいと思います。

この地が、わが国最初の本格的な電信会社のはじまりの地であり、やがて東芝の創業の地ともなります。



出典：明治9年 東京のギエモンの家族写真
前列右より3人目 田中林太郎、4人目 田中久重（ギエモン）、後列右より2人目 田中精助、3人目 石黒いそ、4人目 石黒寛二（田中家資料）

1. 銀座の歴史

明治期の文明開化の象徴といえる銀座ですが、まずは銀座の歴史を江戸時代からふりかえってみましょう。



東京開化名勝京橋石造銀座通り両側煉化石商家盛栄之図
大判錦絵三枚続 歌川広重（三代）明治7年（1874年）